

フランス社会の不可視な移民 ——高齢者介護に携わるブラジル人移民と 可視化の戦略的利用——

渡 会 環

Immigrées invisibles en France : les travailleuses brésiliennes du *care* et leurs stratégies de visibilité

WATARAI, Tamaki

Résumé

L'objectif de cet article est d'analyser le phénomène de subjectivation développé par les aides brésiliennes aux personnes âgées en France, et dont la présence sous le statut d'immigrées ou de travailleuses du *care* est méconnue. Dans cet article, nous mettons en lumière les processus de formation du sujet dans leurs stratégies de visibilité, utilisant leur *brasilidade* — c'est-à-dire leur « être brésilien » —, et dans les relations complexes tissées avec les personnes dont elles ont la charge. D'une faible visibilité en tant qu'immigrées, les Brésiliennes bénéficient d'une intégration relativement aisée dans la société française. Les interlocutrices nous ont indiqué que leur *brasilidade*, ajouté modestement à l'image d'un condiment, leur donnait davantage de visibilité en tant que travailleuses et constituait un élément facilitant leurs relations avec les personnes âgées. Cependant, le travail du *care* nécessitant de répondre aux besoins de l'autre, ces stratégies de visibilité sont soumises aux conditions d'un contexte interculturel évolutif.

はじめに

本論文は、フランスで高齢者介護に携わるブラジル人女性移民を事例に、移民女性の介護従事者としての姿、また労働そのものの可視化を通じた主体化について考察することを目的とする。

フランス国立統計経済研究所 (Institut National de la Statistique et des

Études Économiques) (以下 INSEE と表記) は「高齢者 (personnes âgées)」を60歳以上あるいは65歳以上として高齢者に関するデータを公表しているが、65歳以上として2020年1月1日時点の概算値として公表している年齢別人口のデータから算出すると、総人口に占める高齢者の割合は20.5%となる (INSEE 2020b)。この高齢化社会のフランスにおいて、高齢者介護の一端は、移民によって担われてきた。しかしながら、フランス政府が政策として外国人労働者にビザを発給して「介護」で就労させる制度は存在しない (北澤 2014)。

そのうえ、介護福祉分野で就労する移民に特化した研究はほとんどみられない。この理由について北澤 (2014) は、介護労働が家事労働に従事する女性移住労働者の問題の一部、あるいは派生問題として認識されているためと指摘する。実態として、介護労働に近い、または部分的に介護労働に従事している移民は大別して、EU 域外では北アフリカあるいはサブ・サハラ地域とフィリピンの出身者、EU 域内ではポルトガルや東欧諸国の出身者であるという (北澤 2014)。

家事労働はフランス人女性の社会進出によりその外部化が進むと同時に、「対人サービス」振興によって制度化された (中力 2017)。そして、高齢化があっても少子化もないフランス社会において、家事支援は家族の者が乳幼児であったり、就学期であったり、さらには、高齢を迎えたときにいたるまで、提供されるものとなった。こうしたことが、介護にかかわる公的な資格をもつことなく、育児、高齢者介護さらには炊事や掃除まで広義の家事労働分野で移民が雇用される一因ともなっている (北澤 2014: 102)。本稿が扱うブラジル人女性移民も、炊事や掃除、夜間の高齢者の見守りなどの形で高齢者介護に携わっている。

家政婦や掃除婦、ベビーシッターとしてのブラジル人女性移民の姿に注目して調査をした研究には、一定の蓄積がある。その多くが、滞在許可がないことによる不安定な生活の中で、女性たちが主体化する過程を扱っている。不法滞在によってブラジル人女性たちは雇用主とより一層不均衡な権力関係に置かれるため、「恐れ」「不可視性」「服従」に特徴づけられた主体が生成されるが、その一方フランスで得た収入によってブラジルでの金銭的余裕と社会的プレステージを得るという「パラドックス」も生じている (Carpenado e Nardi 2013)。また、福音派のブラジル人女性移民たちの間では、不安定な就労状況やその中で築かれる人間関係を聖書の教えを

もとに解釈したり、自身の身体を男性からの性的な対象としてのまなざしによってではなく、フランス人女性の仕草や服の着こなし方を身に付けることで自己が管理していると考えることで、移住の経験をより肯定的に捉えていたりする (Gomes n.d.)。

国際移住における女性の主体の構築さらにはそのエンパワーメントの側面については、ブラジル人に限らず、移民研究で着目されてきた (Morokovic 2007)¹⁾。それらが可能となるとときとして、他の労働者との差別化、具体的には文化資本の操作によって労働市場で有利な立場を構築したときが挙げられる。ブラジル人女性移民の場合は、文化資本が「ブラジルらしさ (brasilidade)」として移民自身によって意識され、利用される。たとえば、ブラジル独自の脱毛技術によってドイツの美容のニッチ市場において成功を収めていくだけでなく、ブラジル人女性が考える「人の温かさ」などの「ブラジルらしさ」を可視化させることで顧客との有利な関係を築き、さらには自己実現の感覚を強めている (Lidola 2015)。

「可視化 (visibility)」²⁾はジェンダー、エスニシティ、セクシャリティ、メディア研究においてマイノリティの集団の社会的承認を問題化する中で用いられ、マイノリティが可視化されることによる、エンパワーメントの側面も指摘されてきた (Watarai 2019)。

そこで本稿では、移民であることと高齢者介護従事者であることの交錯がある中で、ブラジル人女性移民の労働者としての姿あるいはまた労働がどのようにフランス社会において「可視化」されている・しているのか、そこになにかしら「ブラジルらしさ」が関与するのか、するとするならどのようなものか、その具体的な過程を明らかにする。

本稿は、高齢者の介護に携わった経験を持つブラジル人女性移民13人に対して行ったインタビュー結果に基づくものである。なお、このうち1人は収入を目的とせず、ボランティアとして高齢者宅を訪問している。半構造化インタビューを用いた調査は、2018年から2019年まで断続的に、フランスのパリおよび近郊都市で行った³⁾。なお、プライバシー保護のため、本稿では被調査者の人名には仮名を用いる。

用語の定義

本稿で扱う移民とは、法的地位に関係なく、その国に一年以上居住して

いる者、とする⁴⁾。

次に、可視化 (visibility) について、Brighenti (2010) は、社会的、技術的、政治的な要素が複雑に絡み合いながら、人々を絶えず社会において特定のポジションに位置づけていくレジームを分析するのに用いている。隠されてみえないものはその「不在が可視化された」(Brighenti 2010: 64) として、「不可視化」を単に「可視化」と対になるものとして捉えることはしていない。この議論を本稿では参照し、可視化を、フランス社会においてブラジル女性が移民として、あるいは労働者として可視的であったり不可視な存在とするレジームを明らかにし、その中で強化されたり弱められたりする女性たちの自己実現の意識を分析する概念として用いる。

最後に、介護を受ける高齢者と介護する者の間で築かれる関係性を分析するために「ケアワーク (care work)」に関する先行研究を本稿では参照するが、「ケア」とともにカタカナ書きのままで用い、「ケアワーク」を他者のニーズに応える仕事として広義に捉える。

山根 (2005) によると、「ケア」の議論はアメリカでまず展開し、男性の道徳と区別される女性の道徳を示すのにキャロル・ギリガンが用いた「ケアの倫理」がその契機であった。フランスには2000年代に紹介され、今日でも英語のケアが訳されずに、イタリアの *care* が用いられている (Guimarães, Hirata et Sugita 2011)。フランス語に訳されていないことの理由として、そもそもの英語での定義やそれを適用する職業の範囲など、「ケア」の根本的な部分について一致した見解がないこと、また言語によってその議論が複雑化してしまうためである。例えば、「ケア」と一致する日本語の「介護」は、日本では日常的には高齢者介護に特化して使われる傾向がある (Hirata 2011)。

記述概念あるいは規範概念なのかというさらなる議論点もあげて、山根 (2005) は、規範的な「よいケア」を提供しようとする者が必ずしも受け手の期待に添えるわけではない「ズレ」を指摘する。この議論もまた、本稿が扱う高齢者介護に携わるブラジル人女性と、サービスの受け手の間の関係性を分析する上で参照する。

フランスの不可視な移民としてのブラジル人

本研究が扱うブラジル人女性の高齢者介護者としての存在およびその労

働の不可視化は、フランスにおける労働移民の歴史の特徴によっても増幅される。

第二次世界大戦後のフランスへの労働移民は二種類に大別でき、戦後の復興や高度経済成長のもと個々の企業や国家事業で大量の外国人労働者が受け入れられた時代と、「選別的受け入れ」と呼ばれる政府による積極的な高度人材の受け入れが行われる一方で個人でフランスへと移り都市で底辺の労働につく人々の流れが顕著となった時代、である。ブラジルからの労働移民は後者の流れによるものである。

戦後は、安価な労働力が必要とされ、スペインやポルトガルといったヨーロッパの近隣諸国、後にアルジェリアといった北アフリカから、大量の移民が集まった。彼らの多くは工場の労働者等として働き、フランスの経済成長を支えた（宮島 2009）。1971年には、ポルトガルと協定が結ばれ、年間65,000人の受け入れが決定された（渡辺 2007: 165）。こうした経緯を経て今日、フランスには世界最大のポルトガル人コミュニティがある。フランスのポルトガル人移民は603,600人で、ヨーロッパ諸国からの移民全体の27パーセントを占める最大の集団である（INSEE 2020a⁵）。また、ポルトガル人女性が長きにわたり家事労働に従事してきたことによる、「家事労働者＝ポルトガル人女性」のイメージが形成されている。さらに、家事労働のポルトガル人女性を通じてブラジル人女性が仕事を紹介されたり、ブラジル人男性もポルトガル人男性から移民男性の多くが従事する建設の仕事を紹介されたりする（Almeida e Baeninger 2016: 139）。こうして、ポルトガル語話者のネットワークを通じた職の斡旋がフランスにある。

ポルトガルからの多くの人の流れを引き起こした賃金稼得移民の受け入れの停止が1974年に決定されると（ド・ウエンデン 2009: 153）、フランスでは出稼ぎの男性労働者の家族の呼び寄せが起こる。このことにより、家族の呼び寄せが目的の移民が、フランスで最も大きな比率を占めることとなる（宮島 2009）。

1980年代後半から増加するブラジル人のフランスへの移動は、ポルトガル人のように政策的に労働者として受け入れられた結果として生じているのではない。また、フランス社会の高齢化に起因して労働力の不足が生じている、建設、土木、家事支援、ツーリズム、レストラン・ホテル関係、農業といった分野（ド・ウエンデン 2009: 155）に、他国からの移民とともに従事する。

なお、ブラジル外務省は、2015年の時点でフランスには70,000人のブラジル人が在住していると推測している。推測となっているのは、非正規滞在者も多いためである (Ministério das Relações Exteriores 2015)⁶⁾。仏領ギアナをのぞいてフランスには、観光目的ならブラジルのパスポート保有者はビザなしで渡航が可能であり、渡航後現地にとどまり、不法滞在者となるケースが少なくない。

一方、INSEE が公表するブラジルからの「移民」数は、2019年時点の概算値で60,400人である (INSEE 2020a)。INSEE が依拠する「移民 (immigré)」とは、「外国で生まれ、外国人として生まれ、現在フランスに居住している」(INSEE 2020a) である。670万人の「移民」には移住後にフランス国籍を取得した者も含まれ、全体の37パーセントを占める⁷⁾。

このような形で移住労働者を受け入れてきたフランス社会では、ブラジル人移民を収めて語るカテゴリーがない。これは、「移民問題」として語られる「ラティーノ」からは抜け落ちてしまうアメリカのブラジル人の事例と通じるところがある (Margolis 2009)。ブラジル人移民数の相対的な少なさに加え、ブラジル人とフランス人の相対的な「文化の近さ」も、「移民問題」としてブラジル人が語られない一因となっている⁸⁾。本研究でインタビューしたマリアは、介護していた高齢者の女性に、他の出身国のケアワーカーと比較されて、次のようなことを言われたことがある。

私とは会話ができる、って彼女は言うの。他の人にも頼んだことはあるけれど、彼女の面倒をみる人たちは普通やはり移民なのだけど、その人たちとは会話が少なかったし、彼女とは違う文化を持っていたと言うのね。(…) 私とは会話ができる、私は礼儀正しい、とか、言っていた。だから私のことを、*ma petite*、私の可愛い子ちゃん、って呼んでいた。私のフルネームを知っていたけれど、そうやって呼んでいたの。私をまるで、彼女の子供のように扱っていた。

ブラジル人女性に対する、過度に性的なイメージはフランス社会に存在する (Andrade 2013)。それにも関わらず、ブラジルという国には比較的肯定的なイメージが付与されており、「ブラジルらしさ」の効果的利用によって比較的スムーズなフランス社会への統合を可能にしていると指摘される (Almeida 2013)⁹⁾。つまり、可視化も不可視化も、ブラジル人のフラ

ンス社会への統合を比較的スムーズにさせているのである。

フランスにおけるブラジル人移民ケアワーカーの誕生

そもそもフランスへのブラジル人の移動は、1980年代以降のブラジル国内の経済危機によるブラジル人移住労働者の増加と、9.11以降米国への渡航が困難となり欧州への移住が実現可能な選択肢として認識されたことが重なって増加した。

フランスに移住した経験を持つブラジル人102人にインタビューした Almeida (2013) は、ブラジルとフランスの二国間だけでなく、その他の国も介在してフランスが移住可能な選択肢として現れることを指摘している。本研究を通じて知り合ったブラジル人女性の間にも、米国と同様英語圏であるイギリスへの入国を試みて経由地としてフランスへと渡り結局はそこに落ち着くこととなったケース、ポルトガル人と結婚したことにより配偶者とともにフランスへと移住したケースが確認できた。

また、フランスへの渡航および居住は、イタリア、ポルトガル、スペインからかつて移民した者の子孫であることを証明してこれらの国の国籍を取得、それらの国のパスポートを手に入れれば、可能となる。本研究では、オペアのビザで最初は来仏し、進学により学生ビザを取得、その後イタリア国籍を取得した女性がいた。彼女はイタリア国籍の取得で、今後不法滞在に陥ることを心配せず、安心してフランスに住むことができると語っていた。このように EU 域内のパスポートを保有することや、フランス人あるいは EU 域内出身者との結婚は、フランスでの居住の可能性をひらく。このような様々な要因でフランスが移住可能な選択肢となったことで、フランスにおけるブラジル人の人口は2008年時点での推測の30,000人から2015年には70,000人に増加したのである (Bógus e Baeninger 2018)。

実際、本研究の調査では、13人中11人が正規滞在であった。残りの2人も、滞在を「正規化 (régularisation)」するための申請の準備を進めていた。

フランスへのブラジル人移住者について、Almeida (2013) は、相互の重なり合いもあるとしながら、便宜的に、5つのカテゴリーに分類している。高度人材、留学生、労働者、配偶者、コスモポリタン、である。フランスはブラジルにとって、ポルトガルによる植民地化また独立後の時代に

においても、文化的モデルであった。エリートや上流階級の子弟はフランスに留学していた。今日でも、ブラジルでは高学歴と収入に応じてフランス文化への関心が高まる¹⁰⁾。1985年まで続いた軍事政権下では、フランスは亡命先でもあった。1980年代以降の労働を目的とした国際移住が増加するに従い、ブラジル人のフランスへの移動は複雑化した形態をもち、人々が取る戦略も様々となった (Almeida 2013)。

ケアワークに携わるブラジル人女性も複数の移住者カテゴリーにまたがっている。Almeida のカテゴリーに加えたいのが、留学生と労働者、双方の重なりを持つと言える「オペア (au pair)」である。フランスをはじめ欧米の国々において体制化されたオペアは、フランスでは30歳以下の外国人がフランス人の一般家庭に入り、子供の世話をしながら語学学校等に通り言語や文化を学ぶという「国際交流」の一環として制度化された。しかしながら、現実にはフランス社会の家事労働の外部化を担うものであり、不可視化されたケアワークとして批判される (Redondo 2018)¹¹⁾。

そして、オペアのビザで「留学」した後、フランスの大学院に進学する者が少なくないのだが (Redondo 2018)、ブラジル政府の奨学金を得て協定校へと留学する「留学生」とは異なり、学習環境および生活環境も自己負担で整えなければならない。本研究でも、2人がオペアで来仏後、フランスの大学院に進学し、掃除やベビーシッター、そして高齢者介護をすることで生活費を工面していた。

こうして正規滞在であっても不安定な経済状況にある場合、ケアワーク、特に家事支援やベビーシッターが、フランスでの生活を成り立たすための手段となる。このように、様々な移住者カテゴリーに分散した、ブラジル人ケアワーカーがフランスに存在する。

ブラジル人女性が高齢者介護を行う場

本稿の冒頭で述べたように、高齢者介護自体が広義の家事労働に包摂されてしまうフランス社会において、ブラジル人女性と高齢者介護の関わり方をまず、整理する必要がある。

本研究でインタビューしたブラジル人女性はすべて、高齢者宅を訪れて介護をしていた。1人の女性は、高齢者の多いマンションで高齢の居住者のためにケアワーカーを手配する仕事をしているが、どうしても手配が難

しい時に高齢者をみることがある。フランスでは高齢者が子世代から独立し多様な生活様式を営んでおり（松村 2005）、個人宅が介護の場としてま
ずある。本研究でインタビューしたブラジル人女性のうち高齢者施設に勤
めた経験があるのは2人のみであった。

個人宅において介護に携わっていても、インタビューをした女性のほと
んどがサービスの利用者と正式な契約を結んでいた。これには、フランス
をはじめとするヨーロッパでは、家事や育児、介護といった分野で技能や
資格を持たない労働者のための雇用を創出し、インフォーマル経済を縮小
させてきたことが関係している（中力 2017）。1990年代よりフランス政府
は「対人サービス（services à la personne）」を振興、家事や介護労働といっ
たサービス部門の産業化を推進してきた。個人雇用主が人を雇用する上で
の様々な申告手続きを簡素化するために、フランスでは「汎用雇用サー
ビス小切手（chèque emploi service universel）」（以下 CESU と表記）という小
切手がつくられ、個人雇用主は CESU によって「申告」が簡単にでき、ま
た税制上の優遇措置が受けられること、給与を受ける側は社会保障費の積
み立ても可能である（中力 2017）。

本研究の被調査者で高齢者の自宅で介護をしていたブラジル人女性のほ
とんどが個人雇用主によって直接雇用されており、それに加えて非営利事
務所（les Associations）に雇用された女性が1人、営利企業に雇用された
女性が3人であった。

ブラジル人女性が関わる高齢者ケアの領域

しかしながら、この「対人サービス」に高齢者介護の一端が組み込まれ
ることもまた、本研究の被調査者の高齢者介護者としての姿を不可視化し
てしまうと同時に、彼女たちが自身の職種を理解することを難しくする。
そのうえ、「対人サービス」では、雇用主が金銭的に支払える範囲あるい
は必要な時に利用するため、本研究がインタビューしたブラジル人女性は、
高齢者のほか乳幼児の世話もするなど、いわば「掛け持ち」でケアワーク
をしていることも、彼女たちの職種の理解を難しくしている。

インタビューにおいて女性たちはフランス語あるいはポルトガル語での
職種の説明を求められると、少し考えた後で「ホームヘルパー（assistante
de vie / assistente de vida）」「高齢者対象のホームヘルパー（aide aux

personnes âgées/ajudante)」等と、回答した¹²⁾。彼女たちが使ったのは日常的な職種表現である。中には、国家資格のある職種、例えば、「社会生活介護士 (auxiliaire de vie)」とフランス語で回答した者もいたが、本研究に協力してくれたブラジル人女性に介護に関わる国家資格を有した者はいなかった。

高齢者施設で働いていた女性の1人は、彼女の仕事は“gouvernante”と呼ばれるものだったと言い、彼女が話してくれた作業内容から施設内のあらゆるサービスを扱う「サービス担当者」と訳することができる。本稿の冒頭で述べたように、「ケア」についての定義がなくそれを適用する範囲も明確でないことから、高齢者施設で提供する「サービス」の範囲も広くなる。そして、そこに介護に関わる国家資格を有せずとも、高齢者施設で移民が働く場が生じるのである。

フランスで高齢者介護に関わる国家資格として、福祉職の「社会生活介護士 (Diplôme d’Etat d’auxiliaire de vie sociale)」、パラメディカル職の「医療系介護士 (Diplôme d’Etat d’aide-soignant)」がある。医療系介護士は訪問サービスにおいてはやはり国家資格である「看護師 (Diplôme d’Etat d’infirmier)」の指導の下で働く (藤森 2010)¹³⁾。

これらの資格を有せず、本研究がインタビューした女性たちが高齢者宅で行うのは、ゴミ出しや部屋の掃除、簡単な食事の準備等である。しかしながら、これらの作業よりも大事なものが以下のように語られた。これを語ったのは、インタビュー当時33歳の大学院生マリアである。オペアで渡仏し、その後大学院に進学して勉学に励む中、勉学と両立できる仕事として高齢者への家事支援を選んだ。選択肢として浮かんだのは、フランス人の友人が在宅介護サービス業界の営利企業に勤めていたためである。友人は、マリアのオペアでの経験を評価してくれたという。1日2時間程度という勤務時間が魅力であった。

会社からは、高齢者の家に行って家の掃除をして高齢者の食事の面倒をみてと言われていたから、家に行って買い物をして食事を準備してと、やるかが決まっている仕事だと思っていた。私は料理が得意な方ではないけれど、看護師が作ったメニュー通りに食事を準備する、そんなシンプルな仕事だと思っていた。でも実際は、ずっと人間的な温かみのある仕事で、一人で生活している彼女たちが望んでいるのは誰かがそばに

いることだったと気づいたの。重要だったのは、人との触れ合いだったのね、私の作業内容よりも。

家政婦、ベビーシッター、掃除婦として雇われる在仏ブラジル人女性についての先行研究では、本研究とは異なり研究対象とした女性が不法滞在者であったことから、女性たちの労働者としての、また労働そのものの不可視性を強調していることが多い。掃除やベビーシッターなど私的な空間での労働に従事するしかなく不可視な労働者となること、そして家事労働自体が社会的に評価されておらず労働としては不可視であること、の二重の不可視性である (Carpenado e Nardi 2013: 100)。高齢者介護という仕事を、この先もこの分野でキャリアを積みたいものとする女性の本研究では1人しかいなかった。だが、高齢者宅という私的な空間で、マリアの語りに出てくる「人の触れ合い」の担い手として、高齢者たちにとって彼女たちの存在は非常に可視化されており、彼女たちもそれを感じている。

ブラジルらしさを通じたケアワークの可視化

介護を受ける高齢者にとってブラジル人女性が非常に可視化された存在となっていることについて、インタビューした女性たちがフランス人高齢者を「見捨てられた」「孤独」者と表現するように、高齢者とその家族との関係に原因があると考えている。ブラジル、フランス両国における家族関係の違いについて、女性たちはそれぞれ、その理由を分析し理解しようとはしているが、フランス政府が進めてきた「高齢者の自立した生活」は、家族とともに高齢者は生活するというブラジルの「家族介護」からみると、理解が難しい。以下のマリアの語りには、具体的な家族介護の例が見られ、高齢者が「見捨てられた」状態についての定義があらわれている。最初の語りはフランスに移る前のブラジルでの介護経験を尋ねられた時の回答で、二つ目は高齢者介護に携わった経験の総括を求められたときの回答である。

ブラジルの文化ではお年寄りを老人ホームに入れることはよくないことと思われているの。だれかが面倒見るとか、まだ配偶者がいれば一緒に住んでいるわけだから、お互いで面倒をみあうけれど。たとえば、私の

おばのおばあさんは生涯おばと過ごしたし、私の曾祖母も祖母とずっと暮らしていた。

介護は、かなり強い、インパクトのある経験だった。最初の仕事はつらくて、面倒をみていた女性のあれほどまでの攻撃性は一生忘れない。でも彼女がそうある理由は、後に彼女が自身の人生を話してくれて分かったけれど。苦悩を引きずっていたのね。ひどいことよね。かわいそうだった。一人の人があれほどまでに見捨てられるなんて。私の文化では、お年寄りを老人ホームに入れることはよくないことと考えられている。一人で家に残すことも。一人で残しておくことも「見捨て」ている、ということよ。彼女はほとんど鬱状態だったし、外出もしなくて、友達もいなくて、家族も来ないし。彼女の苦悩は感じていたけれど、あの攻撃性は許容できない。私が酷く扱われなければいけない義務もない。

しかしながら、そもそもブラジル社会の「家族介護」は神話にすぎず、植民地時代の奴隷制度の家内奴隷に起因し、以降ブラジル社会に根付いた家政婦文化があって可能になっている。インフォーマルに雇用される家政婦によって、ブラジルではこれまで介護の一端が担われてきた (Guimarães, Hirata et Sugita 2011)。雇用主側と家政婦との間、特に雇用主の子供と家政婦の間には親密性がありながらも、「家族」というレトリックがその関係性を表すのに雇用主によって使われることで、働き始めた時の約束を超えた労働と服従が家政婦には求められ、雇用主と家政婦の間の主従関係は相変わらず維持されていると指摘される (Brites 2007)。

こうした権力関係は無視された「家族介護」神話がフランスにいと事実として映し出され、それがブラジル人の高齢者への思いやりの証明となり、さらにはブラジル人は介護に求められる適性を有すると考えられてしまう。だが、この「思いやり」をめぐる、営利企業から派遣されて高齢者介護をしている女性はむしろ、会社から高齢者と親密な関係を築かないよう、注意されている。企業は、契約外のサービスが提供されることや、介護者の代替が効かなくなることを危惧していると考えられる。

「家族介護」の伝統を強調すれば「ブラジル人」を介護サービスの市場で有利な立場に置くことにもなるかもしれないが、その逆が起こらないわけではない。フランス人と外国人が、有資格あるいは無資格で、多様な形

で高齢者介護に関わるなか、一人の人間に介護の仕事の適性があるかどうかの評価は、非常に人種化された形で行われている。つまり、個人はまずある集団に属するとされて、個人の能力はその集団の本質として判断され、さらにはその集団を雇用者への従属的立場に置くという形で、行われているのである。その具体的な例を、Moliner (2014) がパリの要介護高齢者居住施設 (établissement d'hébergement pour personnes âgées dépendantes) で行った参与観察の結果で示している。施設を運営・管理する側は、介護者およびサービス従事者として勤務するマグレブ出身者や黒人¹⁴⁾に対して、介護者に求められる適性があるかどうかを、人種化されたやり方で判断していた。しかし、判断されたほうは、異なる形で、そして肯定的な自己評価をしていた。

こうして適性の有無が個人に備わるかどうかではなく、集団の本質として人種化された形で判断されるのは、高齢者介護に限らず、乳幼児保育でも起こっている。アフリカのフランス語圏から来た女性たちは言語面での問題がないうえ母国の大家族社会で築かれた「母性」が乳幼児保育の適性として強調されるのに対し、英語を話すフィリピン人女性は子どもの英語力を伸ばすということで富裕層宅でベビーシッター・家事支援の職を得ている (北澤 2014)。

ブラジル人がケアワークにおいて有利な立場に立つには、言語以外でのやり方が考えられなければならない。ポルトガル語はフランス語とそれほどかけ離れた言語ではないが、渡仏直後は苦労した、と本研究でインタビューをした女性たちは一様に語っている。ただし、程度はわからないが、数ヶ月で「できるようになった」とも語っている。

しかし、フランス語の能力は、介護を受ける高齢者が提供者に求めるものであるようだ¹⁵⁾。渡仏直後でフランス語ができずそれを理由に高齢者に断られたブラジル人女性の話を聞いた。また、インタビューでマリアは、当初依頼された家事支援よりも高齢者の「聞き役」の役割が大きくなりそれが精神的に負担となったと、語っている。より正確にいうなら、高齢者とは「話す」ことが重要なのである。

しかしながら、その「話す」ことは、長い会話ができるということだけでなく、やりとり、のようなものでも、高齢者との関係を良好にしているようであった。以下は、複数の家庭で子供から高齢者までの世話をしている54歳のパウラが、高齢者男性とのやりとりを語ったものである。なお、

パウラは自身のフランス語力をインタビューでたずねられ、仕事の面接は問題なく受けられるが、長い話をフランス語でできるようになりたいとこたえている。

私のことを軍曹と、彼は呼ぶのね。彼が食事を取ろうとしないと同僚が助けを求めてくるから、私が行くの。「ほらほら、食べるわよ。食べないなんて人は誰もいないわよ。どうしたの。立ち上がって、台所に来て、ちょっとお話ししましょうよ、今日一人で過ごしていたでしょう。来て、来て」。彼らはこういうやりとりが好きだと思うの。そして、彼は私の同僚に言うのよ、「ほら、軍曹が来たぞ」って。

こうしたやりとりは、彼女が行く家庭すべてで行うわけではないことがうかがわれた。フランス語ではそもそも、親しい相手に使う二人称 *tu* を使って話す *tutoyer* と、丁寧な二人称 *vous* を使って話す *vouvoyer* の使い分けが明確であることから、インタビューでは、*vouvoyer* あるいは *tutoyer* を使っているのか、高齢者をどのように呼んでいるかを尋ねている。誰一人、*tutoyer* を使っている者はいなかった。*Tutoyer* の使用はもはや考えられないことで、パウラの話を知ると、その家庭に勤めての年数や親密さによって、高齢者やその家族への話しかけ方、話す内容を選ぶなど、さらに細やかな考慮がされていることがわかった。それらに気を付けたうえで、彼女は「軍曹」を演じており、そうした流儀を持つ彼女の仕事の特徴を、ブラジルで広く用いられている調味料「サゾン (Sazón)」を加えているみたいなのだ、と語った。

サゾン。クノールと同じ調味料ね。愛を込めてつくと、食べ物はいよいよおいしくなるわよね。サゾンは愛。愛が必要、この仕事には。

終わりに

フランスで高齢者介護に携わるブラジル人女性移民は、自身の姿と労働を「ブラジルらしさ」によって可視化しながら、その一方で、フランス社会において「移民」としては不可視化されることで、自身の有能感を感じていた。

そして、高齢者介護において利用される「ブラジルらしさ」とは、ブラジル人女性自身がブラジルとフランスの家族文化を比較する中で抽出したものであり、それはフランス社会で流通しているブラジル人へのステレオタイプとは一致していなかった。

そのブラジルらしさは、インタビューした女性がブラジルの調味料に譬えて語ったように、わずかに利用される程度ではあるが、フランス社会に対しブラジル人女性もまた、人種・民族的な差別の基盤を提供してしまう恐れがある。そもそも、ブラジル人のフランス社会における不可視化が「移民への差別」という問題の解決を意味していない以上、ブラジルらしさの利用がブラジル人女性が期待していたような効果をもたらさなかった場合、サービスの受け手から差別的な扱いが起こる可能性が高くなる。

そもそも、ケアワークが他者のニーズに応える労働である以上、サービスの受け手のニーズをくみ取るという困難がつきまとう。日本の事例では、ブラジル人の介護従事者は、日本では一般的ではないとしながらも、自らが高齢者に抱擁をし、それが高齢者との関係を良好にしていると語っている (Watarai 2019)。介護という仕事にどのような技術、観点や姿勢が必要なのかは、ケアの国際化が起こる中で、交渉され続けるのである。

※本稿は、平成28-令和2年度科学研究費助成事業・基盤研究(C)(一般)「日仏におけるブラジル人女性移民の生活世界の比較研究」(研究代表者:渡会環)[JSPS 科研費16K01995]と平成31年度学長特別教員研究費「移民女性のキャリア形成の可能性の調査—フランスに移住したブラジル人女性を事例に—」による研究成果の一部である。

注

- 1) しかしながら、女性にとっての移住の経験は、出身国と移住先双方のジェンダー規範に組み込まれているため、それらは根本的な変容を受けないと指摘される。そこで、ジェンダー規範や移住の結果がどう「交渉」され、主体化やエンパワメントの余地があるのかどうか、それらを問うことが重要となる (Morokvasic 2007: 71)。
- 2) 本稿では「可視性」ではなく、「可視化」と訳して用いる。本稿の「用語の定義」の箇所でも定義したように、visibility を可視性また不可視性を作り出すプロセスとして捉えるためである。

- 3) 調査では、実際には全部で30人のブラジル人女性にインタビューを行っている。その内訳は、高齢者介護も含め、家事支援、乳幼児保育、ベビーシッターなどのケアワークに携わった経験を持つブラジル人女性が23人、こうしたケアワークへの従事経験がないブラジル人女性が7人である。このほか、ブラジル人相互扶助団体の2団体、ポルトガル語で礼拝を行う3教会、フランスとブラジルの二重国籍を持つ医師、フランスの公立病院の老人科医師とコーディネーターにもインタビューを行った。参与観察はしていない。協力してくれた女性の多くが個人宅で働いているためである。ケアワークへの従事経験がない女性にもインタビューをしたのは、ケアワーク以外の分野で働く機会がどのようにして可能であったのかを知ることで、ケアワークに現在従事している女性が今後別の分野で働く可能性を考察する一助となると考えたためである。30人のブラジル人女性とは、友人からの紹介や、ブラジル人が多く集う教会を通じての紹介、ブラジル初等・中等教育卒業資格認定試験の受験対策講座を見に行ったことで知り合った女性を通じての紹介、先にインタビューに応じてくれた女性の紹介を受けて、知り合うことができた。半構造化インタビューは平均して、2時間であった。インタビュー中はメモを取りながら、録音を行った。なお、調査を終了した後に発生した、新型コロナウイルス感染症による影響については稿を改めて論じたい。
- 4) この定義については、国際移住機関駐日事務所が専門家による一般的なものとして紹介している「国際移民」の「長期的または恒久移住」に一致する（「移民の定義」<https://japan.iom.int/ja/migrant-definition> 2020年10月12日アクセス）。
- 5) フランス国籍を取得したポルトガル人の親から生まれるなどして、生まれた時点でフランス人となる2世以降は、この数に含まれない。
- 6) なお、2015年で3,083,255人のブラジル人がブラジル国外に住んでいるとブラジル外務省は推計している。そのうち、米国は1,410,000人のブラジル人人口が推計される、最大の移住先であった。
- 7) これとは別に、「外国人 (étranger)」数も INSEE は公表しており、「外国人」とは「フランスに居住しているが、フランス国籍を有していない」(INSEE 2020a) 490万人となる。この区分に従うと、外国で生まれた後フランスに移住し今日フランス国籍を有していない420万人が「移民」にも「外国人」にも含まれる。
- 8) 「文化の近さ」はブラジル人からも語られることがある。フランス滞在中に、友人たちとの会食の場において、アフリカ系のブラジル人女性が公共空間で感じる差別について語ったことがある。彼女は、「自分も移民だけれども」と前置きした後で、「私たちはアフリカではない」や「私たちが持っているのはアフリカだけでない、様々な文化の遺産」と言い、差別的な視線を浴び

- る時はアフリカから来た移民との違いを仕草などでみせた、と話していた。
- 9) 女性だけでなく、ブラジル人男性にも性的なイメージは付与されている。2014年に日本で劇場公開されたフランス映画『サンバ (Samba)』では、自称ブラジル人のアルジェリア出身の男性が登場する。彼が踊るシーンや、仕草で「ラテンアメリカ人」好きなフランス人女性の気を引くシーンで、彼の身体に注がれるブラジル人イメージが描き出されている。そして、彼が「ブラジル人」と信じられている間はフランス人に好意的に見られていることがわかる。
 - 10) 今日、ブラジル人の最大の移住先は米国であるが、政府機関であるブラジル高等教育支援・評価機構 (Coordenação de Aperfeiçoamento de Pessoal de Nível Superior) の奨学金を得て留学する先として最も多いのはフランスである。2018年において、2,005人の留学生数を数えたフランスに続くのが、アメリカの1,636人、ポルトガルの942人、イギリスの769人であった (“Distribuição de Bolsistas da Capes no Exterior,” <http://geocapes.capes.gov.br> 2020年10月12日アクセス)。
 - 11) ブラジルでは比較的恵まれた階層の出身で、学歴もある女性たちがオペアで渡仏する。この渡仏の過程にブラジルでは旅行会社が、フランスでは家事労働者を派遣する会社に関わる (Redondo 2016)。2019年、デンマークにおいてオペアの建前と現実が政府で問題視され、制度の廃止が議論された。
 - 12) この質問については、「学生 (étudiant)」であってバイトとして高齢者介護に関わる女性 (2人) や、「ボランティア (bénévole)」として関わる女性 (1人) にはたずねていない。
 - 13) 福祉系の介護職を総称したのが「在宅援助員 (Aide à domicile)」で、そのうち、国家資格である社会生活介護士を持っているのは、藤森の調査時では約2割で、高齢者施設になると比率は上がり、職員の3割であったという (藤森 2010)。
 - 14) 原文では *negras* と、黒人の、と書かれている。施設管理の役職につく「白人」とは異なる、身体的特徴として使われている。「黒人」は、マグレブ以外の、アフリカ大陸とカリブ海地域出身者を指している。
 - 15) 掃除の仕事では語学力はあまり求められないと思われるが、ベビーシッターについても渡仏直後のフランス語ができない時期より従事できる仕事として語ったブラジル人女性は多く、語学力が一番重視されるのは高齢者介護である。

引用文献

Almeida, Gisele Maria Ribeiro de, 2013, “Au revoir, Brésil: um estudo sobre a

- imigração brasileira na França após 1980,” Dissertação de doutorado, Sociologia, Universidade Estadual de Campinas.
- Almeida, Gisele Maria Ribeiro de e Rosana Baeninger, 2016, “A imigração brasileira na França: do tipo histórico às modalidades migratórias contemporâneas,” *Revista brasileira de estudos de população*, 33 (1): 129–153.
- Andrade, Danubia, 2013, “Representações da diferença: a mulher brasileira migrante na mídia impressa da Europa,” *Anuario americanista europeo*, 11: 217–237.
- Bógus, Lucia e Rosana Baeninger orgs., 2018, *A nova face da emigração internacional no Brasil*, São Paulo: EDUC.
- Brighenti, Andrea Mubi, 2010, *Visibility in Social Theory and Social Research*, London: Palgrave Macmillan.
- Brites, Jurema, 2007, “Afeto e desigualdade: gênero, geração e classe entre empregadas domésticas e seus empregadores,” *Cadernos Pagu*, 29: 91–109.
- Carpenado, Manoela e Henrique Caetano Nardi, 2013, “Mulheres brasileiras na divisão internacional do trabalho reprodutivo: construindo subjetividade(s),” *Revista de Estudos Sociais*, 45: 96–109.
- Gomes, Laura Graziela, n.d., “Gênero e neopentecostalismo: a experiência de imigrantes brasileiras em Paris,” artigo não publicado.
- Guimarães, Nadya Araujo, Helena Hirata, et Kurumi Sugita, 2011, « *Care et travail du care dans une perspective comparative : Brésil, France, et Japon* », *La Découverte*, 2(15): 327–340.
- Hirata, Helena, 2011, « *Le travail du care pour les personnes âgées au Japon* », *Informations sociales*, 6(168): 116–122.
- Institut National de la Statistique et des Études Économiques, 2020a, « L’essentiel sur... les immigrés et les étrangers. Données », (le 24 07 2020) <https://insee.fr/fr/statistiques/3633212#consulter> (2020年9月28日アクセス)
- Institut National de la Statistique et des Études Économiques, 2020b, « Population par sexe et groupe d’âges. Données annuelles 2020 », (le 14 01 2020) <https://www.insee.fr/fr/statistiques/2381474> (2020年10月12日アクセス)
- Lidola, Maria, 2015, “Of Grooming Bodies and Caring Souls: New-Old Forms of Care Work in Brazilian Waxing Studios in Berlin,” Alber, Erdmute, and Heike Drotbohm eds., *Anthropological Perspectives on Care: Work, Kinship, and the Life-Course*, New York: Palgrave Macmillan, 69–90.
- Margolis, Maxine L., 2009, *An Invisible Minority: Brazilians in New York City*, Gainesville: University Press of Florida.
- Ministério das Relações Exteriores, 2015, “Brasileiros no mundo: estimativas populacionais das comunidades,” <http://www.brasileirosnomundo.itamaraty.gov.br/>

- a-comunidade/estimativas-populacionais-das-comunidades/Estimativas%20RCN%202015%20-%20Atualizado.pdf (2020年9月4日アクセス)
- Moliner, Pascale, 2014, “Cuidado, interseccionalidade e feminismo,” *Tempo Social*, 26(1): 17–33.
- Morokvasic, Mirjana, 2007, “Migration, Gender, Empowerment,” Lenz, Ilse, Charlotte Ullrich and Barbara Fersch eds., *Gender Orders Unbound?: Globalisation, Restructuring and Reciprocity*, Opladen; Farmington Hills: Barbara Budrich Publishers, 69–97.
- Redondo, Michelle Franco, 2016, “Mulheres brasileiras na divisão internacional do trabalho reprodutivo: construindo subjetividade(s),” Trópia, Patrícia Vieira et al., *Mulheres trabalhadoras: (in)visíveis?*, Belo Horizonte: Fino Traço, 151–170.
- Redondo, Michelle Franco, 2018. “Trajetórias do *care*: de au pair a nounou,” Dissertação de doutorado, Ciências Sociais, Universidade Estadual de Campinas, Université Paris VIII Vincennes-Saint-Denis.
- Watarai, Tamaki, 2019, “From Invisible to Visible: Brazilian Female Migrants’ Occupational Aspirations under the Force of Visibility in Japan,” Teke Lloyd, Armağan ed., *Exclusion and Inclusion in International Migration: Power, Resistance and Identity*, London: Transnational Press London, 171–181.
- 北澤謙, 2014, 「第5章フランス」『JILPT 資料シリーズ 欧州諸国における介護分野に従事する外国人労働者—ドイツ、イタリア、スウェーデン、イギリス、フランス5か国調査—』, 101–119.
- ド・ウエンデン, カトリーヌ・ヴィートル, 2009, 「フランスの移民政策の新たな方向付け?—『選別的移民政策』とその批判—」(宮島喬訳)『移民政策研究』1: 152–160.
- 中力えり, 2017, 「EUにおける『対人サービス』振興政策の背景と課題—フランスとベルギーのバウチャー制度の比較を中心に—」『和光大学現代人間学部紀要』10: 25–40.
- 藤森宮子, 2010, 「日仏比較の視点から見る—フランスの介護職と人材育成政策—」『京都女子大学現代社会研究』13: 73–88.
- 松村洋子, 2005, 「社会保障・社会福祉と高齢者の生活水準」佐々木交賢・樋口晟子編『共生社会への挑戦—日仏社会の比較—』恒星社厚生閣, 55–70.
- 宮島喬, 2009, 「移民の社会的統合をめぐる問題・課題の混在」宮島喬編『移民の社会的統合と排除—問われるフランス的平等—』東京大学出版会, 1–12.
- 山根純佳, 2005, 「『ケアの倫理』と『ケア労働』—ギリガン『もうひとつの声』が語らなかつたこと—」『ソシオロゴス』29: 1–18.
- 渡辺和行, 2007, 『エトランジェのフランス史—国民・移民・外国人—』山川出版社.